[『宮崎産業経営大学研究紀要』第13巻第1号、宮崎産業経営大学法学会・経営学会経済学会、2000年12月、pp. 41-64.]

モーパッサン『モントリオル』を読む　世紀末温泉開発ブーム

成沢広幸

はじめに

ギ・ドゥ・モーパッサン（1850-1893）は1883年、1885年、1886年の三回にわたって胃と心臓の変調[1)]を癒すためシャテルギュイヨン[2)]に滞在したが[3)]、その折りの体験は『ジル・ブラス』紙に「オーヴェルニュにて」という題で掲載されたり（1883年7月17日）、幾つかの短編の題材や背景となったりした[4)]。それらの経験の集大成として誕生した『モントリオル』*Mont-Oriol*（1887年、アヴァール社）は元々『ジル・ブラス』紙に二回にわたって連載され（1886年12月23日、1887年2月6日）、次いで単行本として刊行されたものであった。モーパッサンの長編小説中で唯一地名を関した題名を持つこの小説は、しかしながら『女の一生』*Unevie*（1883年）や『ベラミ』*Bel-Ami*（1885）など他の長編とは違ってフランスでもまたわが国でもモーパッサンの長編の代表作とは見なされていない。確かにこの物語は恋愛のコードに従って読む限り、人妻（クリスティアーヌ）と青年（ブレティニ）との恋の一部始終にせよ、あるいは年頃の娘（シャルロット）と、特に人妻（クリスティアーヌ）という二人の女性の感情教育の物語（彼女たちを捨てた男たちは恋愛において少しも精神的な成長を遂げることがないのに対して、彼女たち二人は傷心によってそれまでの少女的な曖昧な世界から大人の女の覚悟を要求する世界に目覚めていく）として読むにせよ、凡庸ではないが何かもの足りなさを残すのも事実である。

しかし観点を変えてみるとこの小説は恋愛の力学に基づいた読みと共に、もう一つの社会的関心すなわち当時フランス中で見られた温泉開発ブームの物語を喚起する。つまりこの長編小説は恋愛のコードで読み解く方法と金融資本による温泉開発のコードに従って読み解く方法の二通りの読みを可能にするのである。とはいえ、この二つの物語はそれぞれ独立して無関係に存在するわけではなくて、両者は絡み合い一体となってこの長編を形成している。一方を語らずして他方を理解することはできない。恋のたくらみと温泉町の売り出しは密接不可分の関係にあるのだ。本稿は従って『モントリオル』をこのような二つの観点に留意しつつ読もうとする試みである。

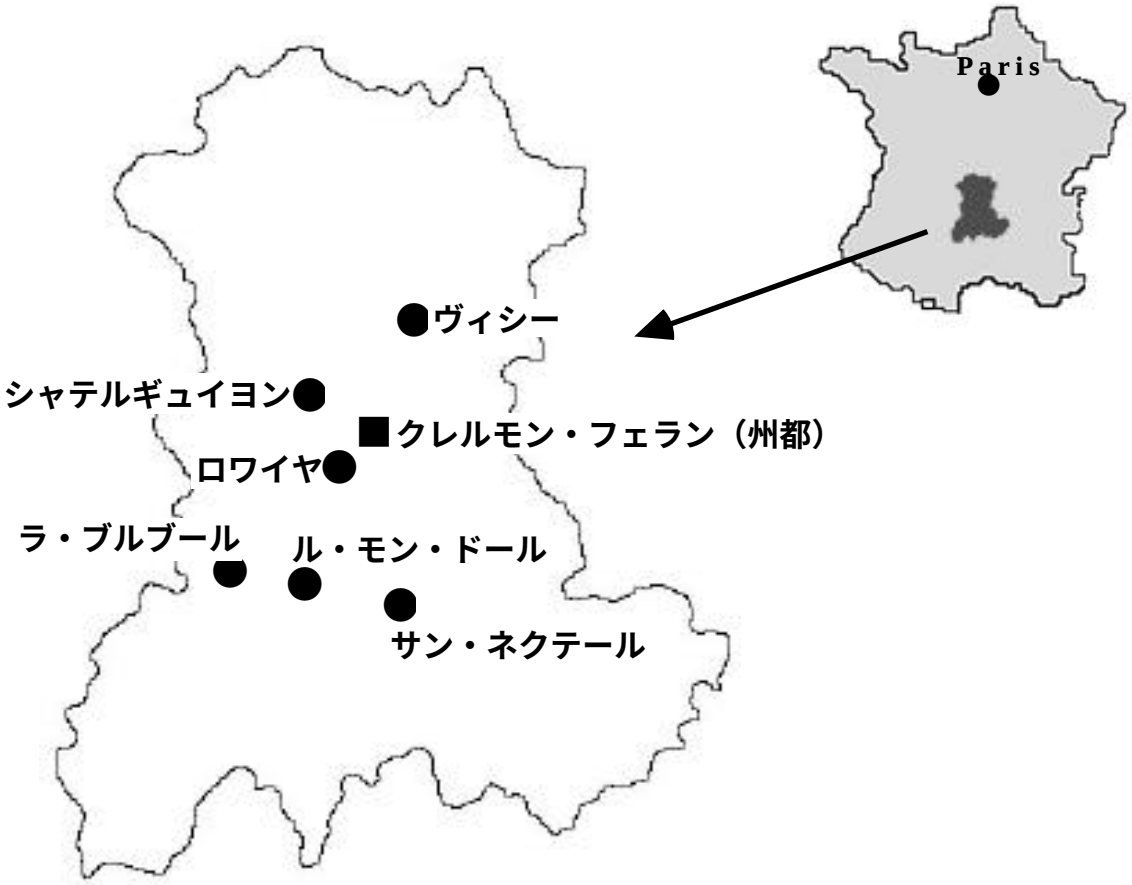
19世紀後半の温泉事情[5)]

一般的にいってフランスの温泉リゾートはナポレオン三世の第二帝政時代（1852-70）に大きな飛躍を遂げた。道路や鉄道などの交通事情の改善（大抵の温泉リゾートは辺鄙な場所に位置していた）、産業の進展による富裕化で温泉療養という一種の贅沢を以前よりも広範な社会層が実践できるようになったこと、ジョアンヌのような観光ガイドブックの普及、1850年以降加速した鉱泉療法医学の進歩、冬の大都市での社交シーズンを引き継ぐ、春から夏にかけての田園や山岳でのシーズンを求める有閑階

級の保養の嗜好などによって各地の温泉リゾートは繁栄した。しかし温泉の適応症や広報宣伝活動以上に、何よりも温泉リゾートの名声を確立したのは、王族や皇族の来訪であった。そのようにしてナポレオン三世の滞在したプロンビエールやヴィシー、サン・ソヴール、皇后の滞在したオー・ボーヌやオー・ショードなどは揺るぎない名声を勝ち得た[6)]。またこの当時はやはり上述のような理由から、ルネサンス以来の特徴であったヨーロッパ規模での温泉療養の拡大が挙げられる。国境を越えて王族や貴族、ブルジョワなど温泉療養者はドイツのバーデン・バーデン、オーストリアのカールスバード、ベルギーのスパーなどヨーロッパ各地の温泉リゾートに滞在したのである。

しかし普仏戦争（1870-1871）の敗北と、その結果としてのアルザス・ロレーヌ地方のドイツ帝国への割譲によって引き起こされたナショナリズムは温泉療養にまで及び、それまで自明のものとされていた温泉町の国際性が疑問視され、いわば温泉ナショナリズムとでもいうべき状況が出現した。こうしてドイツへの敵愾心からフランス人は特にドイツ語圏の温泉療養リゾートを見捨て、国内の温泉リゾートに向かったのだが、このおかげでフランスの温泉療養は戦前にまして盛んになった。バーデン・バーデンに代表されるドイツの温泉療養リゾートに対する「こうした排除現象に企業家の温泉経営に対する嗜好が加わる。すでに第二帝政のもとで生まれていたこのような新たな傾向は第一次世界大戦まで高まった。温泉療養は建設と拡大と美化の時代を迎えた。新たな源泉を発見し、既存の温泉を最大限利用しようとする意思が新たなリゾートの建設によって表されたのである」[7)]。このように多くの実業家が温泉開発とミネラルウォーターの販売で一財産を築けると考えたのだが、モーパッサンが三回にわたってシャテルギュイヨンに滞在したのはこういう時代なのであった[8)]。また温泉町に滞在したのはほとんど富裕な社会層に限られていたが[9)]、そうした「客は『温泉療養者』の一部分でしかなかった。多くの客は衛生学者の説に従って、ただ単に心配事から解放されるために健康によくて、人を楽しませる快適な環境にやってくるのだった」[10)]。モーパッサンのみならず多くの文学者（彼らもまた大抵は裕福な階層に属していた）もまた必要に迫られて、あるいは社交生活のために温泉療養に出かけたのであり、温泉町の発展に関心を抱いたことは確かである。たとえばエミール・ゾラはモーパッサンが『モントリオル』を執筆している間、ル・モン・ドールに妻と共に滞在し、温泉町の発展がテーマの小説を構想したが、モーパッサンに先を越されて諦めたのだった[11)]。自分自身の温泉療養が日記や作品に登場する作家は19世紀に限ってもミシュレ、メリメ、ツルゲーネフ、フロベール、ゴンクール兄弟、エレディア、ヴェルレーヌ、マラルメ、ロスタン、ジッド、プルースト、マラルメ、テーヌ、アルフォンス・ドーデ、ミルボー、コレット、ラルボーなど多彩で「温泉文学史」が編めそうな人数である[12)]。特にラルボーは出身がフランス有数の温泉町ヴィシーというだけではなくて、現在でも世界中で販売されているミネラル・ウォーター「サンティヨール」の開発者である薬剤師ニコラ・ラルボーの一人息子であった。

オーヴェルニュ地方の主な温泉リゾート



最初のシーズン

物語の舞台は数年前に開設された温泉（発見者でありかつ温泉監督医[13]でもある医師の名前を取ってボヌフィーユ温泉と命名された）を持つオーヴェルニュ地方の小さな町アンヴァル、物語の期間は連続した二回のシーズンにわたる[14]。

物語の発端においてアンヴァルの町にはボヌフィーユ温泉しか存在していなかった。この地方の投機家たちによって売り出されてからまだ六年目の新しい温泉であったが、温泉監督医のボヌフィーユ医師がこの温泉を売り出すにあたって執筆したパンフレットには風光明媚な環境が派手な形容詞の多い荘重で感傷的な文体で綴られ、また温泉の適応症が長々と記されていた。要するに他の温泉町を同じ歩みをアンヴァルも開始したわけだった。次いでこの温泉にこの地方出身のオノラ医師とパリ出身のラトヌ医師の二人が加わり、三人がアンヴァルにやってくる患者の処方をしていた。当時（1880年代）、温泉療養リゾートの拡大に伴って繁栄している温泉町で開業することが流行となっていた。当時の開業医、特に田舎の開業医は貧しく、また病弱や高齢の医師にとってシーズン中だけ集中して働けばかなりの収入になる温泉医は魅力であった。この物語のモデルとなったシャテルギュイヨンでは1870年から1914年にかけて温泉医が3人から17人に増加している。ちなみにフランス最大の温泉町ヴィシーでは同時期に医師団が20人から100人と大幅に増えている。1913年当時には100カ所の温泉療養リゾートで総計700名の温泉医が開業していたという（当時フランスにはおよそ

25,000人の医師が存在した）[15]。

侯爵はこの温泉の常連であり、スプレンディド・ホテル（Splendid Hotelという英語表記）に滞在していた。モネキュ親子、オーブリ・パストゥール、ショフール一家、パイユ親子（母と娘）、リキエ、その他全部で20人ほどの滞在者のなかで作者が名前を挙げている中に貴族の名前は侯爵一家以外にはない。こうした滞在者の階層傾向は、もちろんホテルのランクにもよるが、19世紀後半以来目立ってきた貴族からブルジョワへという滞在者の主流の交代を反映している。ラヴネル侯爵は、結婚して2年たつのにいっこうに子供に恵まれない娘のアンデルマット夫人（21歳）を伴っていた。この温泉が不妊にも効能を有するとされていたからであった。侯爵とアンデルマットの行き違いからクリスティアーヌは二人の医師にホテルで診察され、処方を受けた。当時も相変わらず21日間と定まっていた療養期間[16]に患者は医師の診察を5回受け、そのたびに新たな処方（飲用する鉱水の種類と量と回数、入浴治療の種類など）を与えられる慣例になっていた。最初の診察は多くがホテルで行われた。診察の後で彼らは村の様子や温泉を見物に出かけるが、クリスティアーヌはカジノのオーケストラ（といっても構成員は四人だが）の風情に関心を持つ[17]。実際、当時はどんな小さなカジノでも最低数人からなるオーケストラを抱え、療養者の生活のリズムに合わせて最初は朝の8時半、二回目は午後2時、最後は午後8時と、一日に少なくとも三回演奏を行った。このように療養者の生活の時間割は、源泉を取り巻く公園の中に設置されたキオスクで行われるオーケストラの演奏によって区切られていた。

彼らは温泉施設で入浴の回数券を求めるが、その施設の一階はそうした温泉治療（入浴、シャワー、鉱泉飲用、サウナ、マッサージなど）に当てられ、二階はアルコール類販売や音楽演奏といった娯楽用に充てられていた。そういう風にして温泉町にはつきものの遊歩道や温泉施設、公園などを散策している内にホテルの鐘が鳴ったので、彼らは昼食に引き返す。当時はホテルが鐘を鳴らして昼食と夕食の時間を知らせていた。一般的にフランスでは1900年頃まで食事は午前10時（昼食）と午後5時ないし5時半（夕食）に摂られていたが、19世紀中頃からはパリや大都市では食事の時間帯が遅くなっていった。しかし温泉町に関してこの慣習が守られたのは、鉱水の飲用と入浴治療という温泉療養の実践に関係がある。実際、1900年以前には温泉療養者の一日というのは医師の処方を厳格に守ればかなり窮屈なもので、午前6時前には起床し、午前中は温泉施設や源泉での治療（入浴やシャワー、鉱泉飲用）に費やされ、10時半ないし11時に昼食となる。エクスカーションをする場合には軽く昼食をとった後に1時頃に出発し、4時から4時半ぐらいに帰着して源泉で鉱水を飲用して、夕食を5時半にとる。多くの療養者は午後をカジノで過ごし、劇があれば夕食後にもカジノに姿を見せる。11時、遅くとも12時までにはすべての施設が閉鎖される。このような一日がほぼ21日間繰り返されるわけだが、ホテルでの食事に関しては当時はレストランで個別に摂るのではなくて、大テーブルでの会食が普通であった。席順はホテルへの到着順であったので、自分の前後に誰が到着したかは会食を楽しくもし、味気なくもする重大問題であった。また療養者に大量かつ多彩な食事を出すことについてはホテル側と医師側の間にしばしば緊張が生まれた。医師の側は病人をいたわる食事を要求したのに対し、ホテル側は他のホテルとの競争と療養者に付き添ってきている健康な人々（簡単にいって療養者と同じ数）のためという二つの理由で食事を美食にする傾向があったのである。ちなみにヴィシーのあるホテル（最高級というわけではないが第一

級のホテル）での1895年7月28日の夕食のメニューは以下の通りである（食事込みの料金は一日10フランであった）：グリーンピースのクリーム煮、グザヴィエ風伊勢エビ、ロシア風添え物の牛ヒレ、モンパンスィエ風子牛の胸腺、バリグール風アーティチョーク、ブレス産去勢鶏の串焼、トルコ風サラダ、モカアイスクリーム、ヌガーのピエスモンテ、デザート盛り合わせ[18]。

さて侯爵の一行は昼食の後にオリオル老人の畑の岩山が爆破される光景を見物に出かける。老人が長年耕作の邪魔になっていた岩山をついに爆破するという噂はすでに午前中に聞いていたのだった。遠巻きに取り囲んだ群衆の見物する中で岩山は爆破され、群衆はその跡に殺到した。やがてその騒ぎの原因が温泉の湧出にあることがわかる。アンデルマットは湯の湧出を注意深く見つめる。そしてその晩のホテルの夕食の席上でアンデルマットは新温泉の売り出しの決意を侯爵をはじめとする会食者に語る。左手のシャテルギュイヨン、右手のロワイヤに伍してアンヴァルでも売り出し方法さえ巧妙なら成功するというわけである。

> すべては手腕、機転、臨機応変、度胸の問題です。温泉町を作り出そうというには、それの売りだしかたを心得ていねばなりません。それだけでたくさんです。そして、それを売りだすには、パリの大医師団をこの事業に関係させねばなりません。…鉱泉を手に入れるだけでは、じゅ
> うぶんではありません。それを飲料にしなければなりません。しかもそれを飲料にするためには、新聞その他で《匹敵するものなき鉱泉！》などと自己宣伝するだけは足りません。われわれの必要とする鉱泉愛用家大衆や患者大衆にたいし、医薬に散財を惜しまぬ、格別に人の言を信じやすい大衆にたいして影響力を持っている唯一の連中、つまり医師諸先生の口から、ひかえめにそういわせるこつを知っていなければなりません。…
> は医師の口をのみ通して語れ、です[19]。

実にここに温泉町を売りだす資本の論理が明確に述べられている。基本的に温泉の質や温泉地の気候条件は別として、何よりも効果的な宣伝、籠絡した医師を通しての療養者獲得、そして鉱水をボトリングして販売するというミネラル・ウォーター事業の必要性まで言及されている。実際、鉱泉開発から引き出せる利益は、ミネラル・ウォーターをフランス内外で販売できなければ大きなものにはならない。ミネラル・ウォーター販売からあがる利益は、温泉施設（この維持は非常に高くついた）の運営から上がる利益よりももっと多額だったのである。ミネラル・ウォーター開発に特化した手本はロワール県のサン・ガルミエやアリエ県のサンティヨールなどにすでに存在していた。そこに存在するのは温泉治療施設でも鉱水飲用者でもなく、ただミネラル・ウォーターのボトリングと発送を行う企業のみだったのである。サン・ガルミエではすでに1870年に400万ボトル、さらには1910年には2500万ボトルの出荷量を達成していた。サン・ガルミエのミネラル・ウォーターは開発者の農夫の名前をとってバドワと呼ばれる。またヴィシーから7キロのサンティヨールの鉱水は第二帝政時代にヴィシーの薬剤師ニコラ・ラルボーによって売り出されたが、前述のようにこれは文学者ヴァレリ・ラルボーの父親である[20]。

アンデルマットは夕食後に直ちにオリオル老人のもとに赴くが（前述したように温泉町のホテルの夕食時間は当時午後5時ないし5時半という早いものであった）、その道すがらゴントランに向かって語る言葉もまた疑いを知らない資本家の誇りと全能感に満ちている。

> きみには、きみらのような人間には、わからないだろう、どんなにおもしろいものか、事業ってものが。…それ
> 時に、政治であり、戦闘であり、外交であり、いっさいなのだ、すべてなのだ！常に探求し、発見し、発明し、あらゆることを理解し、あらゆることを予想し、あらゆることをくふうし、あらゆることを敢行しなければならない。今日、大争闘とは、金でたたかわれる戦いのことなのだ。…
> われわれこそ、今日の権者なのだ。そうだ、真の、唯一の権者なのだ！…
> われわれの事業では、人間を操縦するすべをも、誘導し懐柔するすべをも心得ていなければならない。いや、まったくの話、そんなふうになんでもやってのけられたら、生きるってことは楽しみだぜ！[21)]

すでにアンデルマットの頭の中ではちっぽけなアンヴァルの村が都市となり、多くの大ホテルが建ち並び、大勢の裕福な療養者と付き添いで賑わう姿が見えているのである。オリオル家に着くと早速アンデルマットは老人に温泉の湧き出た付近の区画の買収の交渉にはいる。今回は提案だけで正式な申し込みは老人がゆっくり考えたからということで引き上げるが、オリオル老人の方もオーヴェルニュの狡猾な農民のこととて、息子のジャックと相談しながら、今回の唐突な出来事からどのようにしたら最大限の利益を得られるかを考える[22)]。一方アンデルマットの側でも慈善会を開催してその寄付集めという名目でクリスティアーヌとオリオル姉妹を接触させてオリオル家の出方を探ろうとする。教会でのミサ、そこでの寄付集め、カジノに場所を移しての余興など、温泉町につきものの気晴らしによってクリスティアーヌとオリオル姉妹は親しくなる。アンデルマットは新温泉の売り出し準備のためにパリに戻っていったが、彼らつまり侯爵と息子ゴントラン、ブレティニ、クリスティアーヌ、ルイーズとシャルロットのオリオル姉妹の六人はそれからしばしば馬車で近辺のエクスカーションに出かけ、親密の度合いを増していく。またこのような交際を通してブレティニは次第にクリスティアーヌに惹かれていくが、彼女の方でも彼に対する関心を高めていく。

彼女は「生まれつき屈託のない、おだやかな、満ちたりた心を恵まれていたので、深い夢ごこちを味わったことなどかつてなかった。…
うぶな少女たちがそのうちに生きているあの眠りから、まだ目ざめていなかった。それは、心情と、思考と、感覚との眠りであって、ある種の女たちには死ぬまでつづく眠りである」[23)]。そうした一種の麻痺状態に生きていた彼女にとって、女優相手の色恋沙汰で自殺まで考えた激情家だというブレティニは遠い存在のように思えたのだった。しかし日々の交際や時折のエクスカーション（侯爵やゴントランなどと一緒であった）で、彼は絶えずクリスティアーヌの満ちたりた平穏な心のなかに波紋を起こすのであった。彼女は次第にその波に自分の心が揺すぶられるのを感じていく。お互いの好意が遊戯以上のものになるのに時間はかからなかった。

しかし、クリスティアーヌのうちに、真実の媚態があらわれたせつなから、彼女が男を誘惑するために女本来のあらゆる手管を発見したときから、…彼は、この淡泊な道楽者はこの天真らんまんな女の嬌態にひっかかってしまって、彼女を愛しはじめた[24]。

二週間ほどたってアンデルマットがパリから戻ってきたとき、すでに彼女の心はブレティニに移っていた。しかしアンデルマットは妻の変化にいささかも気づかず、オリオル老人との交渉に取りかかり、決着させるが、老人は最後まで土地の売却を拒んだ。

けっきょく、つぎのごとく話が決まった。すなわち、オリオルじいさんが会社に現物出資するのは、細流ぞいにひろがっている地所全部、つまり鉱泉の出そうな地所全部と、加うるにカジノとホテルを建てる予定の丘の頂と、斜面のブドウ畑若干である[25]。

アンデルマットはこの交渉をまとめると直ちにパリに引き返していったが、ホテルを発つとき「妻にはキスするのを、あわや忘れるところだった。それほど、ほかのことに気をとられていたのだった」[26]。だがクリスティアーヌの方でも夫のそういうすげない態度によって気持ちが楽になったことも確かだった。この夜、初めて彼女の部屋に忍んできたブレティニの腕の中にクリスティアーヌは我が身を委ねる。

アンデルマットはその後数週間、パリで財界や銀行界から出資者を募り、彼ら七名を引き連れてアンヴァルに戻ってくる。即日新会社の設立総会、引き続いて重役会を開催するのである。出席者は公証人や書記を別にすれば、アンデルマットと彼の連れてきた7人の株主、侯爵、ゴントラン、ブレティニ、オリオル老人と息子のジャック、そしてアンヴァルの三人の温泉医の一人ラトヌ博士であった。彼はアンデルマットに取り入って新温泉の温泉監督医という得がたい地位を約束されていた。

アンデルマットは総会を宣言する挨拶の中で、ボヌフィーユ泉を管理運営する会社と競争状態にはいること、そしてそれに勝利するために同じ地方の温泉リゾートのル・モン・ドールに通じるモントリオル（オリオル山）という名称を新温泉に与えることを提案する。また公益を旨とする温泉施設の認可を得る予定だとも述べるが、実際当時にあっては源泉を巡る係争が多く、源泉保護のために既存の源泉の半径1キロ以内の温泉開発は禁止されていたが[27]、源泉の地下水脈はそれ以上に拡がっていたのでこうした規制は効果が薄かった。そこで出てくるのが「公益」という考えで、これは1914年まで鉱泉規制の基本法として機能していた「鉱水の源泉の整備と保護に関する1856年7月14日法」のなかで重視された考えであった。この法律に則って公益性を認められた源泉の周囲では厳しい保護措置が取られた。開発禁止区域の半径も必要に応じて1キロ以上に変更された。このように源泉所有者にとって自分の開発権が侵害されないという有利な面が存在した一方で、公益が認可された源泉については国の監視の目が光り、所有者といえども国の事前許可なくしてはいかなる整備事業も行えなくなった。さらに源泉の管理が杜撰だったり公益に叶っていなかったりした場合には国が源泉を収用する可能性も存在した。自由に源泉整備を行おうとする所有者の中には、

こうしたリスクを理由として公益性認可の申請を見送るものも現れたほどであった。またこうした認可には医学アカデミーが好意的な意見を寄せねばならなかったが、政治的な引き立てがあるとこれは容易だった。パリでアンデルマットが奔走した中にこれらの方面への働きかけがあったことは間違いがない。彼は認可の「確信」を持ち、「大臣の言質」も得ていることを挨拶の中で述べているからである。

総会に引き続いて行われた重役会で社長に選出されたアンデルマットは新温泉の売り出しに関して、かつてホテルの夕食の席上で行ったような宣伝重視の戦略を再び述べる。このような広告宣伝の発展はモーパッサンが身をもって体験していた19世紀後半の現実を繁栄している。すでに第二帝政時代に大きな影響力を持った記事広告は存在していたとはいえ、雑誌や新聞の大広告や観光ガイドブック、各温泉リゾートや観光協会がシーズンごとに発行するパンフレット類などがそれにとって代わっていった。各温泉リゾートは競って温泉の効能や娯楽を書き立てる広告を出したが、各鉄道会社もまた、連絡している温泉リゾートの源泉やカジノなどを自社ポスターに描きたてたのだった[28)]。このようにジャーナリズムの進展と相まって新聞や雑誌にあらわれた提灯記事や大広告、街の新たな装飾となったポスター類が世人の目を引いていた。「温泉地はまた比較的最近の産業、つまり広告に興味深い可能性を与えた。1863年にブルミエ（ヴィッテルの開発者。筆者註）がデラックスホテルの中の一つを落成したとき、彼はパリの40人の医師たちと同じく首都のジャーナリズムの様々な代表者たちを旅費持ちで招待し、丁重にもてなした。公告と広報は温泉リゾートの予算の基本的な項目となった。大部分の温泉リゾートはパリのジャーナリズムの記事によって売り出されるか、金銭ずくの小冊子（『ル・モン・ドールの15日』とか『サランのシーズン』、『エクサン・サヴォワの夏』といった形式）や、『ヴォージュの鉱泉リゾートガイド』（1879年にブルミエの長男アンブロワーズが出版した）のようなガイドブックによって知らされた。…ひも付きでない様々な
や劇作、オペレッタなどが温泉町の生活をもてはやしていた。しかしそれでも温泉リゾートの広告費は増加し続けた。たとえばヴィッテルは広告費に1882年までにおよそ15万フランを費やしたが、この額は次の10年間には10倍となったのである」[29)]。

> 近代の大問題と申せば、みなさん、宣伝ということであります。宣伝こそは、現代商工業の神であります。宣伝をよそにしては、救済の道はありません。最も、宣伝術なるものは、むずかしく、複雑で、多大なこつを必要とします。…今日では、やんやと騒ぎたてれば、かえってうさんくさく思われ、けばけばしいポスターは人々の苦笑を買い、名まえを街頭に呼び歩くのは、好奇心よりも警戒心のほうをよけいに呼び起こさせます。とは申せ、公衆の注意をひくことは必要であります。しかして、注意をひいたあとでは、納得させねばなりません。したがって、売りにだそうと思うものがきまれば、宣伝術は、手段を、功を奏しうる唯一の手段を発見するにあります。ところで、みなさん、わたくしどもとしては、鉱泉を売りにだそうとしておるのですから、医師を通じて、患者をつかまえねばなりません[30)]。

そして新温泉の適応症を三つのグループに分け、それぞれの分野の治療の大家の医学部教授を新温泉に招待して、彼らが望めば土地代は無料で格安の別荘を進呈するという方法で彼らを懐柔籠絡し、彼らの患者、すなわち温泉療養者を来訪させようとい

う計画を示す。資本家が金の力を借りて医師を意のままに操り、医師は患者を動員するという図式ができがったのである。実際、「医師たちは開発業者の野心に奉仕する用意が出来ていた。というのも彼らは、リゾートの売り出しは医学というよりも社交や建築、さらには資本主義によって行われることを承知していたからである」[31)]。

その晩のホテルの夕食会は村長や司祭も交えて盛大なものになったが、クリスティアーヌとブレティニは浮かない顔をしていた。侯爵が今回の療養期間が長引いていることで翌日に息子やクリスティアーヌと共にパリに戻ることにしていたからであった。最早二人きりで自由なときに会うことができなくなったブレティニは茫然自失の体であったが、クリスティアーヌはパリに戻ってからも逢瀬を続けられるようにときびきびと手はずを整え、ブレティニを励ますのだった。

このようにアンデルマットはボヌフィーユ温泉に対して宣戦布告したわけだが、実際にシャテルギュイヨンで起こった温泉投機騒動というのはこれとはやや趣を異にしている。というのも、物語では既存の地元資本の温泉に対してパリ資本（といってもオリオル老人も参加しているが）の外部勢力が戦いを挑むという構図になっているが、実際に起こったことはその反対だったからである。

1875年にシャテルギュイヨンの温泉監督医に就任したアルマン・アレクシス・バラデュック医師はモーパッサンの父親の友人でもあり、モーパッサンにシャテルギュイヨンでの温泉療養を勧めた人物であるが、1878年にライヴァル関係にあった二つの温泉（40年来の歴史を持つバルス温泉と歴史の浅いブロソン温泉[32)]をパリの銀行家フランソワ・ブロカール（すでにロワイヤとラ・ブルブールの温泉開発に関係していた）の資金供与によって一つに統合しようと思い立つ。ブロカールはまず新たな源泉調査のためと温泉施設やホテルを建設するために、シャテルギュイヨンのありったけの土地を買い占めた。それから二つの温泉の経営者との買収交渉の結果、1878年9月にシャテルギュイヨン鉱水会社が設立される。社長は銀行家ブロカールで温泉施設を改修し、サルドン川沿いの買収した土地にスプレンディド・ホテル（Splendid Hotelという英語表記であった）を建設した（この当時はパラ家の経営）。このホテルはモーパッサンが滞在し、小説中でもそのまま名称が使われている。またブロカールはクレルモン・フェラン大学理学部化学教授のトゥルショ（すでにピュイ・ドゥ・ドーム県の鉱泉についての多くの著作を著していた）の助力を得てこのリゾートを売り出そうとした。同年1878年に新たな源泉が開発され、高名な鉱泉療法学者の名を取ってギュブレと命名された。

このようにシャテルギュイヨンの温泉はパリ資本によって統合されたのだが、この温泉リゾート売り出しによって土地の人間は恩恵を被ったとはいえ、必ずしもパリ資本の成功に好意的ではなかった。その結果、今度はクレルモン・フェランの卸売商や金利生活者など、オーヴェルニュ地方の名士たちが地元資本を結集して、ブロカールの先例にしたがって、温泉の出そうなサルドン川沿いの土地を地主シャピュから買い占め、コミューヌの協力を得て1882年にシャテルギュイヨン大温泉会社を設立した。そこから二つの温泉開発会社の間の争いが起こり、さらに温泉医たちや温泉会社にたいして自分の土地の売却をもくろむ多くの住民を巻き込んだ争いに発展した。しかしこの会社は二年後に行き詰まり1884年に破産した。土地や温泉施設は結局既存の温泉会社に転売された[33)]。

1883年にモーパッサンが初めてシャテルギュイヨンに来訪した折りは、まさにこの温泉リゾートは敵対する温泉会社間の対立の最中にあった。バラデュック医師の治療を受けていたモーパッサンは毎日この戦いとそれが引き起こす多くの小競り合いを聞かされていた[34)]。

翌年のシーズン

翌年のシーズンにはすでに新温泉モントリオルの温泉治療施設やカジノ、遊歩道、ホテルなど温泉町の主要部分をなす施設が完成していた。一般的にいって温泉町の都市計画において「もっと大事だったのは観光用の設備であり、これは時代を追う毎に改善されてきていた。道路が建設や改修され、歩道が出現し、公園や遊歩道が造られ、日陰や装飾として道沿いに木が植えられ、祭りのためのホールや舞踏会場、劇場、カジノが作られて療養者や観光客の娯楽に供された。彼らの数はまだ少なかったが、自分の健康よりも娯楽設備の方を多く気にかけていたのである」[35)]。

アンデルマットは斯界の権威のマ・ルーセル、クロシュ、レミュゾの三教授の後援を得て、彼らは自分たちの患者をそれぞれ二、三百人ほどモントリオル温泉に送ってきていたが、彼ら自身も招待を受けて滞在する予定であった。シーズンは6月初旬からであったが正式な開設式は7月1日になっていた。

さてモントリオル温泉の開設式は源泉の命名式から始まる予定であったが、クロヴィス老人が温泉の入り口で温泉の治癒効果を否定する中傷を誰彼かまわず広めているというので、すでに昨年クロヴィス老人のことでオリオル親子の陥穽に落ちたことを今では十分承知しているアンデルマットは、今度は自分がクロヴィス老人を利用して温泉の治癒効果をアピールしようともくろんで、クロヴィス老人に取引を持ちかけ、老人を黙らせる。後にクロヴィス老人に治癒の芝居をさせて、積極的に温泉の宣伝に利用しようというのだ。

> 痛風病みの治療をはじめてやったとき、オリオル親子にいっぱいくわされたが、今度が自分がものごとを信じやすい病人たちをなぶりものにしていたのだった。治療のことになると、病人というものは、実にろうらくしやすいものである。そこで、いまでは彼は、この治療の道化しばいを自分自身のために演じているのだった[36)]。

アンデルマットはまた、クリスティアーヌ、ルイーズ、シャルロットという名前を付けたモントリオル温泉の三つの源泉の命名式のあとの舞踏会の前に、ゴントランを呼んで、すでに彼が母親の遺産をすべて費消し、将来父親の遺産として入るはずの40万フランもすでに借金のかたに取られていること、つまり早晩破産は免れないことを告げる。かといってゴントランには多くの持参金を持つ裕福な娘を見つけだして、籠絡するほどの根気はなかった。そこでアンデルマットはオリオル老人の二人娘のいずれかと結婚することをゴントランに提案する。それによってゴントランは破産を免れ、アンデルマットは娘の婚資となる温泉付近の土地を入手できるのである。

> ご存じのとおり、ぼくは初手から、ここの温泉場で大当たりをとった。ところで、あのこすっ

からい百姓が手放さずにいる地所を全部、ぼくの掌中に、というよりむしろぼくたちの掌中に握れば、ぼくは大もうけをしてみせるんだがね。浴場からホテルへ、ホテルからカジノへとうちつづいてるブドウ畑だけについていっても、このぼくは、アンデルマットは、あすにでも、百万フランはだそう。ところで、あのブドウ畑にしろ、丘をずっととりまいているほかのブドウ畑にしろ、娘たちの嫁入り資産になるそうだ。…そこでだ……もしきみさえその気なら、ぼくたちふたりで、ひとつ大仕事をやってのけられなしないかね？[37)]

そのための第一歩がこれから始まる舞踏会なのだった。このようにアンデルマットはすべて計算ずくでこの提案を行ったのだが、ゴントランはさりげなくこう答える。「ぼくは、シャルロット・オリオルに申しこんでみよう」[38)] 当然この発言は二重である。すなわち舞踏会でのパートナーの申し込みと、結婚の申し込みである。この晩からゴントランのシャルロットへの接近が開始された。

アンヴァルの町にはボヌフィーユ温泉の温泉監督医のボヌフィーユ医師、新設のモントリオル温泉の温泉監督医の地位におさまったパリ出のラトヌ医師、この両人とも折り合いのいいこの地方出身のオノラ医師というそれまでの三人に加えて、新温泉の開設で新たに二人の温泉医が加わった。といっても最初のイタリア人医師マゼーリ博士はスペインの貴族ラマス公爵夫妻お抱えの侍医なのでモントリオル温泉に開業しにやってきたわけではない。とはいえその美男ぶりと彼がおかれている特殊な状況によってこの30がらみのイタリア人医師は、稀少物を手に入れようとするマニアさながらの嫉妬と羨望を婦人患者たちの間に巻き起こす。

この美男の医師は、数日のうちにあらゆる婦人患者の目標となった。彼の意見を少しでも聞きだそうとして、ありとある策略が用いられていた。…
れというのが、この先生は、一般公衆のための奉仕するという立場にはいないからであった。…彼は公爵夫人に所属し、公爵夫人だけに専属していたか
である。こうした立場自体が、かえって人々の努力をあおり、欲望をそそった。それに、公爵夫人はやきもちやきだ、ひどいやきもちやきだ、とひそひそかげ口をたたくものもいた。それで、これら婦人たちみんなのあいだでは、美男のイタリア人博士の助言を得ようとして、激しいせりあいが演じられた[39)]。

もう一人はレミュゾ教授のつてでこの温泉町にやってきた老齢の信心深いブラック博士であった。一般的に何人かの温泉医のいる温泉町では宗教的・政治的に穏健な考えの老医師がいて、そういう医師は聖職者や伝道師、修道士や修道女のみならず、彼らの紹介する信心深い患者を多く持っていた。温泉町では信心深い医師というのも患者にアピールする一つの営業姿勢となっていたのである。聖職者は位階の上下を問わず17世紀から温泉療養者の重要な部分を占めていて、たとえばコートゥレでは通常120人から150人の司祭が滞在し、年々その数は増加していったという[40)]。ブラック医師はまさにこの典型であって、司祭から紹介された患者を得たが、このシーズンにドイツのマルデブルク公妃というカトリックの老妃殿下がモントリオルに来訪し、ローマの枢機卿の紹介でブラック博士を召しだしてからは「彼の診察を受けることは、たしなみのよい、高尚で、大いに当世風のこととされていた。ブラック博士こそは、理想的な唯一の医師、婦人

が絶対に信頼できる唯一の医師である、といわれていた。…ことに、老女連は博士を崇拝していた」[41]。このように貴族の来訪の及ぼす効果は大きく、貴族の位階があがればそれだけ影響力は増した。モントリオル温泉にはすでにドイツの老妃殿下の他にスペインのラマス公爵夫妻が滞在していたが、これとてアンデルマットの働きかけがなかったと言い切れるだろうか。このようにして各温泉町は究極の広告塔としての王族や皇族の来臨をこいねがうようになる。何もこのような現象は温泉町だけに見られるのではなくて、ニースやカンヌなど冬期の避寒リゾートにおいても、またフランスのみならず他の国でも同様であった。「王や王族は何も発明しないが、彼らの来訪こそがリゾートにとっては決定的なのである。誰を挙げようか。インド女王を兼ねるヴィクトリア女王はワイト島やグラースを世に出し、イレールやニースのシミエ、エクス・レ・バンのために多くの寄与を行った。ビアリッツの常連であったユージェニー皇后はそこにナポレオン三世を連れて行ったが、今度はナポレオン三世がビスマルクを伴うということになった。ヴィシー、プロンビエール、バーデン、ホンブルク、エムス、カールスバードなどの今日最も評価されている温泉リゾートは19世紀に君主たちや首相たちが頻繁に訪れたリゾートである。…著名な人物の来訪は、適切な宣伝活動を行　った偉大医師たちの巧みさによって、あるいは資本主義的な開発業者によってお膳立てがなされるということがある。ジャーナリズムの力はリゾートにとって非常に重要なのである」[42]。モーパッサンは、少なくとも11回は温泉療養リゾートに滞在してフランスの温泉町の発展に多大の貢献をなしたナポレオン三世の第二帝政の開始（1852年）とほぼ時を同じくして誕生（1850年）しているので、こうした時代の雰囲気を身をもって感じていたはずである。

さて美男のイタリア人医師に婦人患者が熱を上げていることで、マゼーリ医師が人々の噂の的となったが、そのうち人々の関心は他の噂に移った。ラヴネル伯爵ゴントランが農民の娘シャルロットに求愛しているという噂である。

> ゴントランはカジノ開業祝賀舞踏会の口あけにシャルロットと踊ったあの晩からというもの、この娘にまつわりついていた。男たちが自分たちの魂胆を隠しだてもせずに相手のきげんをとろうとするときに見せる、ありとあるこまかい心づかいを、おおっぴらに、娘に向かって見せていた。それと同時に、二人の平生の交際は、陽気で自然ないきごとの趣をおびていたが、これがいずれはふたりを愛情へと導くのは当然だった[43]。

姉のルイーズは無意識の嫉妬も交えて妹に意見するが妹は聞き入れず、また父親のオリオル老人はある種の満足感をもってこの交際を容認する。クレルモン・フェランの令嬢たちに混じって修道院で教育を受けたとはいえ、ブドウ作りの家に生まれた自分はやがて公証人か弁護士、医者あたりと結婚することになるだろうと漠然と思っていたシャルロットに、今まで思いもかけなかった世界が開かれようとしていた。「彼女はひと息入れるごとに、口の中で『ラヴネル伯爵夫人』とつぶやいていた」[44]。さらに何回か侯爵とクリスティアーヌ、ブレティニなどのいつもの顔ぶれでエクスカーションや遊びを重ねてゴントランは求愛の成功を確信する。このように準備を整えるとゴントランはアンデルマットにオリオル老人の意向をそれとなく打診させる。だがその結果は意外なものであった。

じいさんのやつ、こちらの手には乗らなかったんだ。「その話は、どっちの娘にするかで、ちがってきまさあ。姉のルイーズのほうだったら、婚資はこうなっとる」と返事して、浴場の周囲にある地所をいちいちあげたんだ。浴場をホテルに、ホテルをカジノに結んでいる地所、つまり、こちらには必要欠くべからざる地所全部、ぼくにとっては評価できぬほどの価値を持っている地所なのさ。これに反し、妹娘には山の反対側をくれてやるというのだ。これにしたって、たぶん、のちのちにはたいした金目になるものだろうが、ぼくには一文の値打ちもないのさ。…
最上等地は手ばなさずに、妹娘をきみにくれてやろうというのさ。…
ぼくがきみだったら……肩の棒をかつぎ変えるがなあ」[45]

翌日からゴントランは妹に加えて姉にまで慇懃な態度を示し始め、徐々に妹から姉に関心の比重を移していったが、

官能の上ではシャルロットにひきつけられ、利得の点ではルイーズに心をよせているゴントランは、自分がこんな役回りを演ぜねばならぬことにいらいらして、ルイーズには微笑を見せながらも、口の中ではこうつぶやいていた。「なんと！おまえのくそおやじめ、おれにいっぱいくわした気でいやがるが、いまにおまえをこっぴどいめにあわしてやるぞ。おれの腕のいいところをお目にかけてやるからな」[46]

というように、心の中ではオリオル老人に対する復讐の念に燃えていた。しかしルイーズの方は妹に対する意識しない嫉妬に付け入られた形となり、自分の巡り合わせに驚き、ほとんど勝ち誇ったような晴れやかな心持ちになっていた。「自分の混乱した頭の中にただよっている考え、唯一の考えは、自分が妹に勝ったという勝利感だった」[47]。

一方、クリスティアーヌは開業祝賀会の晩、外で落ち合ったときに始めてブレティニが最早彼女を愛していないことにはっきりと気づいた。それはパリで逢瀬を重ねた結果、彼女が妊娠したからであった。

この男が情人の種族に属しこそすれ、ごうも父親の種族には属さない人間であるのを、彼女はさとっていなかった。彼は、女が妊娠したと知ってから、思わず知らず、彼女から遠ざかり、彼女にいや気がさしているのだった。およそ女にして、生殖の役目を果たしたものは、もはや恋愛の対象となる資格はない、と、彼はかつてしばしばいっていた。…肉体をそなえた女性の場合、彼があがめるのは、女神ウェヌス、その神聖なわき腹が、石女の清らかな形体を永久に保つべきウェヌスにほかならなかった[48]。

しかしクリスティアーヌはこの現実を受け入れず、ますますブレティニに執着し、「オーヴェルニュに着くやいなや、矢つぎばやの必死な手紙を書いてポールを呼び寄せたのだった。…そしていまでは、はしたない、泣きつかんばかりの愛情で、彼を悩ませているのだ」[49]。ブレティニも優柔不断な性格からはっきりとした決着をつけられないでいた。そこに持ち上がったのがゴントラン

の変心の件である。ブレティニはゴントランの変心を詰るが、逆にクリスティアーヌとの仲を当てこすったとも取れる反論を受け、ブレティニは沈黙してしまう。

寂れてカジノも閉鎖したボヌフィーユ温泉と対照的にモントリオル温泉には療養客が押し掛けていたが、アンデルマットはさらなる整備を考えていた。つまり療養者や付き添いの人々をホテルの外に連れだして様々な気晴らしをさせて滞在期間を長引かせるために、ホテルとカジノを結ぶ石ころだらけのひどい道路を快適な環境に整備する計画であったが、これにはゴントランと姉娘ルイーズとの結婚にともなって彼女の婚資としてもたらされる地所が不可欠であった。そして姉娘の攻略は一同での度重なるエクスカーションや、オノラ医師の家を舞台としたデートなどで順調に進んでいたので、この整備計画への不安はなかった。もう一つ温泉リゾートに一般的な宣伝方法も実行される。それは「気象通報」であり、「観光ガイドブックは気温の一覧表や風向きの比較などを載せていた」[50]が、それを温泉監督医のラトヌ医師の助言に従ってパリの大新聞にも載せようというのである。

> およそある温泉リゾートの気温はといえば、近隣の競争温泉リゾートの気温よりも上々で、変化が少なく、むらなく温暖でなければなりません。ですから、おもだった言論機関の気象通報に予約加入をなさってください。…年末にとる平均温度が、近接地で最上と思われる平均温度よりもいちだんとよろしくなるようにとりはからいましょう。大新聞を広げたとたん、とっさにわたくしどもの目につくのは、夏場ならヴィシーや、ロワイヤや、ル・モン・ドールや、シャテルギュイヨン等々の気温であり、冬場ならカンヌや、マントンや、ニースや、サン・ラファエルの気温なのです。それで、そういう土地では、年がら年じゅう暖かくて、晴天つづきでなければならないのですよ、社長さん、それというのも、パリっ子にこう思わせたいためです。「ちぇっ、うまくやってやがる、あそこへ行ってるやつらは！」ってね[51]。

ゴントランの変心がはっきりしてから、しかもその相手が自分の姉であるのを間近から見て、シャルロットは以前の陽気さが抑制され、落ち着きが加わり、やや辛辣さも併せ持つようになっていた。度重なる一同でのエクスカーションやオノラ医師宅での姉妹との同席によってブレティニは次第にこの妹娘にひかれていく。まさにゴントランの評するようにブレティニは「恋愛を背に載せて疾走する馬」で「一つを地面にふり落としても、つぎのがとび乗る」[52]のであった。

> すでにしばらく前から、彼は、自分ではそれと気づかずに、この見捨てられた娘のみずみずしい、身うちにしみとおるような魅力にとりつかれていた。実にかわいくて、気だてがよく、すなおで、まっ正直で、むじゃきな娘だと見ぬいていたので、はじめは同情の念に心を動かされたのだった。それは、女たちの悲しみが、いつでも、われわれに催させる、あの涙もろい同情の気持ちだった。ついで、たびたび娘と会っているうちに、自分の胸の中に…あの愛情の小さな種子を芽ばえさせていた。そして、いまでは…自分が恋のとりこになっているのを感じ始めていた[53]。

この間、ゴントランのルイーズへの求愛はある晩、アンデルマットが使者となってオリオル家に正式に申し込むところまで進展した。アンデルマットは以前のオリオル

老人の言質を引き合いに出して、彼女の婚資としては土地のみ（もちろんアンデルマットにとってはかけがえのない土地である）を要求した。オリオル老人は持参金を出さずに済むというので安心したが、少しでも多くの地所を留保しようとアンデルマットと議論し、図面上でも実地でも婚資となる土地を確認するのだった。

ブレティニとゴントランはオノラ医師の家でお茶をするオリオル姉妹と毎日のように会っていたが、ある時からその家にイタリア人医師のマゼーリが出入りするのに気づく。この美男の医師は追従から料理まで第一級の腕前を披露してたちまちオノラ家のお気に入りとなる。彼の計画は明らかであった。ルイーズは婚約しているので、妹娘のシャルロットを狙っているのだった。元々マゼーリ医師は公爵夫妻、特に公爵夫人のお気に入りだったが、モントリオルに滞在するようになってからは、アンデルマットが招待した三人の高名な医学部教授の一人クロシュ教授が伴ってきた娘と親しげに交際していた。それが教授の反対でシャルロットに乗り換えようとしているのだと思われた。オノラ医師宅での毎日の二人のつばぜり合いは「ちょうど、同じ獲物に食いついている二匹の犬のように」[54]激しくなっていった。シャルロットの方でも、「ゴントランの寝がえりにこりていたから、これからもありうる幻滅にたいしてはちゃんと心がまえができている、気持ちも錬られて武装されている、とでもいったふうだった。彼女は、二人の求愛者のあいだを、手ぬかりなく、巧妙に泳ぎまわっていた」[55]。ところがある日、マゼーリとシャルロットの親密そうな様子に激高したブレティニは、彼女と二人きりになる機会を作り、彼女にマゼーリの企みについて忠告する。しかし彼女の方でもそういうことは承知していた。彼女は少女らしい意地悪さを伴った無邪気さからマゼーリ医師の来訪を楽しんでいただけであった。

> シャルロットは、顔をあげていた。その微笑のうちに、りこうそうなまなざしのうちに、そり身の小さな鼻に、くちびるのあいだから見えている歯の、ぬれた、つやのあるかがやきのうちに、飾りけのないあいきょうが、陽気なちゃめっけが、愛すべきいたずら心がありありとあらわれていたので、ポールは荒々しい衝動によって、彼女のほうにかりたてられるのを感じた。このあいだまで愛人の足もとに、情熱にわれを忘れた彼を投げださせたのも、この衝動なのだった。…ポールは、いきなり娘の両手をつかんで、もの狂おしくそれにキスした。それは、おもわず感情にかられた一瞬だった。…「このぼくは！あなたを愛してる、かわいいシャルロット、ぼくは、あなたを愛してる！」…シャルロットは立ちあがっていた。ポールも腰を上げた。娘を両腕に抱いて、夢中でキスした[56]。

その様子を偶然台所に入ってきて見たオリオル老人は激高してブレティニを非難し、つかみかかるが、ブレティニは逆にオリオル老人にシャルロットとの結婚を申し込む。しかし老人はゴントランに引き続いてブレティニもオリオル家の財産を盗みに来たと思いこみ、ブレティニを罵倒する。

> それは、まるでアンデルマットとその家族や友人連が毎晩やってきては、じいさんのものをかすめとり、地所なり、温泉なり、娘たちなり、なにかをかっさらってゆきでもするかのように聞こえるのだった[57]。

ブレティニもたまりかねて、シャルロットの持参金など当てにしていないことを言

明してしまう。実際彼は小麦粉の卸で財産を築いた父親のおかげで大金持ちの青年の放蕩生活を送って来たのだった。この言葉に老人の心も落ち着き、持参金なしでの結婚を承知する。たとえばバルザックの作品などを読んでいるとき、当時19世紀のしかるべき人々の結婚における妻方の「持参金」制度の重要性に驚くことがある。身分に見合った持参金がないばかりに修道院や館で未婚のまま一生を終わるという貴族の娘も珍しくはなかった。この長編でも豪農のオリオル老人は娘の結婚に際して、長女ルイーズにも次女シャルロットにもその社会的地位にふさわしい持参金をつけねばならないのだが、この場合その条件を先方から放棄したのである。社会的身分に伴う義務よりも吝嗇を選んだオリオル老人はブレティニの申し出を受けたのだった。成り行き任せで娘の気持ちも確かめず、婚約に追い込まれてしまったブレティニはオリオル家を出たとき、地球がもはやこれまでと同じ方向に回転していないような気がした。「そのうち、こうも考えた。『まあ、いいさ！ひょっとしたら、世界中捜しまわったって、あれより分のいい相手は見つからなかったかもしれんぞ。』そう思って、運命の手でしかけられたこのわなを、心の底ではうれしく感じていた[58]。

翌日にはこのブレティニ婚約のニュース（オリオル老人があちこちで吹聴していた）や、マゼーリ医師がクロシュ教授の娘と駆け落ちしたニュース（シャルロットへの言い寄りは教授の娘を嫉妬させるためのものか、それを隠れ蓑にして教授に隠れて密かに会い続けていたのかは誰にもわからなかった）、モントリオル温泉の源泉のボーリング作業を指導した療養中の元技師オーブリー・パストゥールが卒中で急死したニュース[59]、ブレティニ婚約の報を聞いたクリスティアーヌがショックのあまり早過ぎる陣痛を迎えたニュースなどがアンヴァルの町をかけ巡った。クリスティアーヌは肉体的な苦痛に加えて、自分の愛する男、これから生まれる命の父親でもある男が他の女を愛していて、その女と結婚しようとしているという肉体的苦痛以上の責め苦に苦しんだ。彼女が今まで恐れていたのは彼の情人たちの存在にすぎなかったのだ。15時間の陣痛の後彼女は女児を出産した。アンデルマットは彼女の付き添いにオノラ夫人を考えるが、彼女は最初は激しく拒絶する。しかし残酷な好奇心に負けて二組のカップルの彼女の家での様子を語ってもらう。彼女とブレティニの仲を知る由もないオノラ夫人は自宅でのブレティニなどの様子を彼女の求めに応じて縷々語って聞かせる。彼女は自分の恋を追想するように、ブレティニのシャルロットに対する求愛の様子に聞き入る。そこへ彼女にブレティニ婚約のニュースを教えて早産のきっかけを作った老医師ブラック博士が見舞いが告げられるが、それを知った彼女は急に錯乱状態に陥り、その後二日間安静を必要とした。

完全に正気に返ると彼女は自分がすっかり別人になったような気がした。すでに何もかもが遠い過去に位置しているような気がした。そして彼女は悟った、今後ブレティニと愛し愛されることはもうないのだということを。彼女は初めて訪れた明晰な思考の光でもって自分の精神を照らし出していた。

> この光が、人生を、人間を、事物を、地上にあるものいっさいを、地上全体を、かつて見たこともない姿で、見せてくれるのだった。…彼女はさとった、さまざまなできごとのさなかを、だれかれが並んで歩いてはいるけれど、なにものをもってしても、けっしてふたりの人間をほんとうにいっしょに結びつけることはできないのだ、と。…クリスティアーヌは、子供を胸に

抱きしめながら、「永久にさようなら－さようなら！」とつぶやいた[60]。

ここに人間同士は結局は理解し合うことができないのだというモーパッサンのペシミズムを見ることができるだろう。「世界のはじまり以来の人間たちの努力が、無力ながらも、たえまのないもの」であって、「外殻の中に永久に閉じこめられて、永久に孤独である人間たちの魂が、もがいて、その外殻を突き破ろうとする不屈の努力」[61]であることは認めても「人生において、人間たちを、空の星ほどにも互いに遠く隔てさせておく、この目に見えぬ障壁を突き破ることは、これまでだれにもできなかったし、これからもできないだろう」[62]ことがクリスティアーヌの思考という形を借りて述べられているのである。

一方、クリスティアーヌを捨てた罪の意識を持つブレティニは、彼女に促されてようやくホテルの部屋を訪ねる決心をするが、そこに待っていたのはすっかり冷静に彼を迎えたクリスティアーヌだった。彼女はすでに娘と共に生きていく覚悟、ブレティニとは二度と会うこともないという覚悟を決めていたのだった。ゆりかごのカーテンが上から下まで金のピンで留められているのを見たとき[63]、「彼には、相手がなにを望んでいたのかがわかった。自分をこの子どもから永久に隔てているこの金製ピンの障壁を前にして、胸をえぐられるような感動が彼をとらえ、全身をひきつらせた」[64]そして彼女の「おしあわせを祈ってますわ」という言葉にその場を辞すのだった。

また、この日見舞いに訪れたアンデルマットはボヌフィーユ温泉の買収を妻に告げる。これで名実共にアンデルマットはアンヴァルの温泉の支配者となったのである。ユダヤ人の機敏な金融資本家にして誠実な夫として描かれているアンデルマットはアンヴァルで自分の望むものすべてを手に入れたことになる。ただ一つ、自分の子供を除いては[65]。温泉監督医のラトヌ博士が公開で行った「自動式体操療法」の実験に立ち会ったアンデルマットが、不妊に効果があることを暗示しながら述べる温泉の効能礼賛を聞いてみよう。

> わたくし自身、その効能を、自分にとってきわめてたいせつなある人物にためしてみることができたのです。わが家の血統がたえないとすれば、それこそ、このモントリオル温泉のおかげであります[66]。

さて、いまや昨年とは土地も人間もすっかり様変わりをしたのを目の当たりにしてゴントランが冗談半分に述べる意見は案外、温泉町に代表される保養リゾートというものの核心をついているのかも知れない。

> 奇体なところだ、温泉町ってのは。地上にいまもなお残っている唯一のおとぎの国だねえ！二カ月のうちに世界のほかの部分で十カ月のあいだに起こるよりも多くの事件がもちあがるんだからな。実際、温泉ってやつは、鉱物質をふくんでるんじゃなくて、まるで魔術的な力をそなえているみたいだよ。それにエクスにしろ、ロワイヤにしろ、ヴィシーにしろ、リュションにしろ、どこでも同じことさ。それから、海水浴場だってごたぶんにもれない。ディエップでも、エトルタでも、トルーヴィルでも、ビアリッツでも、カンヌでも、ニースでも、そうなんだ。そこでは、ありとある民族、ありとある社会の見本、どえらい山師どもの見

本に出っくわす。よそでは見られない人種と人間との交錯に、すばらしい情事にぶつかる。女たちも、いみじき安直さ、すばやさで、はめをはずすからね。パリじゃなかなかなびかぬ女でも、温泉場だと、ころりとまいっちまうよ！男たちにしても、そういう場所で、アンデルマットみたいに身代をつくるやつもあれば、オーブリ・パストゥールみたいに往生をとげるやつもある。またもっとひどいめにあって…結婚をするやつもある…ぼくみたいに…それからポールみたいにね[67]。

全くもって温泉リゾートに限らず、保養リゾートにはこうした面がある。こうした魔法が崩れるのはたとえばマンの『魔の山』の場合は第一次世界大戦の砲声によってであり、ハンス・カストルプは祖国を救うために魔法の眠りから目覚めてアルプスの結核療養リゾートから下界に下るのであったが、温泉町の場合もそれまでの文化がいったん崩れ去るには第一次世界大戦を待たねばならなかった。両大戦間からはマス・ツーリズムの興隆によってかつての温泉療養リゾートのイメージは様変わりをしていく。だがそれはまだこの物語から30年も先のことである。

註

『モントリオル』の底本にはプレイヤード叢書の MAUPASSANT, *Mont-Oriol* in *Romans*, édition de Louis Forestier, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1987. を使用し、引用の邦訳に関しては基本的に『モーパッサン全集』（春陽堂書店、1965年）の第一巻所収の桜井成夫氏の訳によった。なお註の中でプレイヤード版の『モントリオル』を指すときには、単に *Mont-Oriol* とのみ記すこととする。

01）梅毒の治療という説もある。

02）この温泉町の名称はモーパッサン滞在当時はChâtel-Guyonとハイフンがついていたが、19世紀末からハイフンが取れてChâtelguyonと表記されるのが普通になった。

03）モーパッサンはシャテルギュイヨン以外にも、エクス・レ・バン、プロンビエール、バニェール・ドゥ・リュション、ディヴォーヌ・レ・バンなどで温泉療養を行っている。Cf. Angéline Bourlangue et Alain Soldeville, *Les promenades de Maupassant*, Chêne, 1993, p. 9.

04）*Humble drame* (1883), *Malades et médecins* (1884), *Mes vingt-cinq jours* (1885) など。

05）20世紀中葉までのフランスの温泉事情については拙稿を参照。成沢広幸「フランス温泉療養リゾート沿革」、『経済学論集』第9巻第1号、宮崎産業経営大学経済学会、2000年。

06）「持続する名声」については18世紀、19世紀、さらには20世紀初頭においても、それは王室メンバーの来訪に由来する。Cf. Marc Boyer, *Histoire du tourisme*

de masse, PUF, 1999, pp. 16-17.

07）Philippe Langenieux-Villard, *Les stations thermales en France*, PUF, 1990, p. 33.

08）シャテルギュイヨンはオーヴェルニュ地方のピュイ・ドゥ・ドーム県に位置し、標高430m、現在の人口は4,743人（*Le guide rouge France 2000*, Michelin, 2000.による）、療養シーズンは4月25日から10月12日まで、適応症は消化器疾患、泌尿器疾患、婦人病などである。Cf. Charles Pomerol, *Terroires et thermalisme de France*, Editions du BRGM, 1992, p. 150.この温泉は17世紀から知られていたが、第二帝政時代初期にはその評判は50キロ足らず離れただけの温泉町ヴィシーが享受していた名声には遠く及ばなかった。

09）しかし極貧者のための無料療養や、聖職者や軍人、公務員など特殊な社会層については様々な割引制度が存在した。

10）Nadine Beauthéac, *L'art de vivre au temps de Proust*, Flammarion, 1999, p. 112.

11）Armand Wallon, *La vie quotidienne dans les villes d'eaux (1850-1914)*, Hachette, 1981, p. 307.

12）Cf. *Ibid.*, cinquième partie.

13）温泉ごとに一人任命される公的な役職で、温泉に関する規制や取り締まりの責任者。こうした職責の起源は17世紀初頭のアンリ四世時代に遡る。この物語の時期の直後、1889年にこの制度は廃止された。

14）実際アンヴァルという小さな「温泉」町はシャテルギュイヨンの南3キロのヴォルヴィック街道沿いに存在する。今日の人口は1,300人以上であるが物語の当時1880年代にはおよそ700人の村であった。しかしアンヴァルの鉱泉は摂氏15度の冷泉であり、この小説のモデルとなったのはモーパッサンが三回滞在したシャテルギュイヨンであることに疑いはない。

主要登場人物　ラヴネル侯爵：この温泉町に続けて毎年滞在するようになった人物で、クリスティアーヌとゴントランの父親。ウィリアム・アンデルマット：クリスティアーヌの夫でパリの金融資本家、ユダヤ人。ポール・ブレティニ：ゴントランの友人。オリオル老人：土地の豪農で温泉の湧き出た地所の所有者、その長男ジャック、長女ルイーズ、次女シャルロット。

梗概　第一部。ラヴネル侯爵は娘夫婦のアンデルマット夫妻、息子ゴントラン（および息子の友人ブレティニ）とアンヴァルのホテルに温泉療養のために滞在しているが、このときまでアンヴァルにはボヌフィーユ泉しか存在しなかった。彼らの散策を通してアンヴァルの温泉のカジノ、遊歩道、鉱泉飲用場、公園のオーケストラ、温泉治療施設の中身、食事を知らせるホテルの鐘の音、さらにはホテルでの会食形式の食事の様子など、温泉療養のなじみの光景が簡潔に紹介される。彼らの滞在のはじめにある出来事が起こる。アンヴァルの大地主であるオリオル老人が自分の畑の一部を占めていた小さな岩山を耕作の邪魔になるからと爆破したところ、そこから温泉が湧出した。見物人が様々な感想を持つ中で、たちまちアンデルマットはボヌフィーユ泉とは違う温泉施設をそこに作る可能性に気づき、オリオル老人の説得をはじめとする具体的な算段に取りかかる。一方ブレティニとクリスティアーヌは毎日散策やエクスカーションに出かけるうちに彼らが最初

にお互いに抱いたあまり好意的ではない印象は次第に修正され、少しずつ惹かれ合っていく。しかしパリとアンヴァルを行き来して温泉売り出しの事業にかまけているアンデルマットはすこしも気づかない。アンデルマットが温泉の売り出し準備を進めるのと平行して、彼らの恋もまた進展する。アンデルマットを社長とし、侯爵やゴントラン、パリの財界人や土地を現物出資したオリオル老人などを株主とし、ブレティニも出資した温泉開発会社が設立され、本格的な温泉地整備が始まるところでこの年のシーズンが終わる（パリに戻ってからも二人は逢瀬を重ね、クリスティアーヌはブレティニの子を身ごもる）。

第二部。翌年のシーズンにはすでに新温泉は完成し、アンデルマットがパリの数名の高名な医師を通して行った宣伝工作のおかげで療養客の来訪も上々となる。前年と同じ顔ぶれの主だった療養客も再びアンヴァルに滞在する。ブレティニは妊娠して最早彼にとって魅力を失ったクリスティアーヌを避けるようになったが、彼女の方では一層彼に執着し、アンヴァルへも再三の懇願によって来させたのだった。しかしクリスティアーヌに対するブレティニの態度は新温泉の評判と反比例して冷えていく。彼女もそれに次第に気づかざるを得ない。一方アンデルマットは母親の遺産を食いつぶしたゴントランの破産が間近いことを彼に伝え、それを避けるにはオリオル老人の二人娘の一人と結婚して、婚資代わりの土地（これがゴントランの主たる債権者アンデルマットにとっては温泉施設の発展のために是非とも必要であった）を得るしかないと説得する。温泉施設とホテル、ホテルとカジノを結ぶそうした土地が入手できればアンデルマットは事実上アンヴァルの新温泉を支配できるのだった。自分は破産を免れ、義理の弟は垂涎の土地を得るこの提案をゴントランは承諾する。オリオル老人の娘は二人とも女子修道院で教育を受け、双子のように似ていたが、より理知的な姉ルイーズよりもより官能的な妹シャルロットを選んだゴントランは彼女に数週間の間言い寄り、彼女が求婚を承諾すると確信するやアンデルマットを使者に立ててそれとなくオリオル老人の意向を探らせる。巧妙で狡猾な老人はすでにゴントランの求婚を察知し、またアンデルマットに必要な土地の価値も十分に承知していたので、彼女の婚資としては差し当たりは利用価値のない部分の地所（後になれば別荘地として高く分譲できる区画ではあったが、アンデルマットには無価値の土地であった）を提示し、アンデルマット垂涎の土地は姉娘のルイーズの婚資として用意する旨の回答を与える。ゴントランは憤慨しながらもシャルロットを捨て、巧みに姉娘に乗り換えるが、ルイーズは妹への無意識の嫉妬と競争心からこの求愛を受け入れる。さらにアンデルマットは不振を極めていたボヌフィーユ温泉を買収して、アンヴァルの温泉をすべての支配者となった。一方今や重荷となったクリスティアーヌを遠ざけつつあったブレティニは傷心のシャルロットを慰めるが、彼は次第にこの娘に惹かれていく。二人の関係を全く知らない彼女の方でも傷ついた心を少しづつ彼に開いていく。ある晩、激したブレティニが彼女を初めて思わず抱擁した現場をオリオル老人に見つけられ、非難されたブレティニは彼女との結婚を申し込んでしまう。現場を押さえられた弱みから持参金なしという条件に老人も安心する。実際ブレティニは莫大な年収を得ていたので、ゴントランと違って妻の財産を当てにする気持ちはなかったのだった。しかしブレティニの愛が冷めたのと妊娠末期の様々な思い煩いで気の滅入っていたクリスティアーヌはブレティニの結婚の

噂を聞いたとき大きなショックを受け、その結果月足らずの陣痛が起きてしまう。女児の出産とその後の一時的な錯乱を経て彼女はすっかり精神的に生まれ変わり、ブレティニを諦めることができた。彼女は少女のようなメンタリティから大人の女の覚悟を持つ女性へと生まれ変わったのだ。彼女の部屋をようやくの思いで訪ねたブレティニは彼女のすっかり醒めた態度と、彼の子でもある女児を彼に見せないこととで彼女の覚悟を悟り彼女の部屋を辞すのだった。

15）Cf. Wallon, *op. cit.*, p. 177.

16）「面白いことに温泉治療方法の適用の中にはいくつかの変わらない特徴が見受けられる。たとえば通常は21日間とされる治療期間である。すでにしてヘロドトスは治療を三週間にとどめるように忠告していたが、このことはおおよそのところ月の位相と一月の期間に相当していた。この21日間という習慣は近代のほとんどすべてのリゾートでも繰り返され、そうしたリゾートでは三週間の治療に引き続いて三年の治療を勧めたのであった」。（Jean-Paul Clébert, *Guide de la France thermale*, Horay, 1974, p. 31.）

17）カジノはナポレオン一世治下の1806年6月24日の勅令によって、温泉町にシーズンの間だけ営業が許可された娯楽と賭博の複合施設であったが、第二帝政下ではこの決定をもとにしてカジノがほとんどすべての温泉町に開設され、温泉施設には不可欠のものとなった。たとえばシャルル・ガルニエが1880年代に建設したコントレクセヴィルのカジノには、射撃場やクレー射撃場、ジム、ボクシングのリング、フェンシング練習場などが付属していた。Cf. Eugen Weber, *Fin de siècle La France à la fin du XIXe siècle*, Fayard, 1986, p. 229.

18）Cf. Wallon, *op. cit.*, p. 159-160.

19）*Mont-Oliol*, p. 510.

20）Cf. Wallon, *op. cit.*, pp. 98-99.

21）*Mont-Oliol*, pp. 515-516.

22）オリオル老人の狡猾さは、翌朝に源泉の近くで出会ったクロヴィス老人を利用することを思いつくことにもあらわれている。というのも「この土地一帯では名の売れた痛風病みの老人」（*Mont-Oliol*, p. 523.)というクロヴィス老人の正体が実は密猟者であり、人目のないところでは敏捷に走り回ることを知っているオリオル親子は、その秘密の厳守および数百フランの謝礼と引き換えに、源泉の脇の掘った即席の湯壺でクロヴィス老人が入浴を続けて、その結果温泉の効能でリューマチが癒えたことにするという約束を交わすからである。アンデルマットをはじめとして医師たちもこの芝居にすっかり欺かれてしまう。

23）*Mont-Oliol*, p. 493.

24）*Ibid.*, p. 547.

25）*Ibid.*, p. 572.

26）*Ibid.*, p. 575.

27）1848年の臨時政府の政令による。「（…）鉱泉水の源泉は公共の財産であり、その保護は人間にとってと同様国益にとっても重要である以上、そしてこうした施設の存在を危険にさらしうる試みを前もって知らせることが望ましく、また緊急時に備えるために、いかなるボーリングや地下での作業も、その利用が常に許可されるであろう鉱泉水の各源泉から少なく

とも1000メートルの半径内においては、県知事の事前許可を得なければ実施しえないであろう」。Cf. Langenieux-Villard, *op. cit.*, p. 27.

28）Cf. Wallon, *op. cit.*, p. 114.

29）Weber, *op. cit.*, pp. 229-230.

30）*Mont-Oliol*, p. 584.

31）Marc Boyer, *Le tourisme de l'an 2000*, Presse universitaires de Lyon, 1999, p. 91.

32）ブロソン家は以前にはヴィシーの源泉の開発利用権をしばらく賃借していた。ヴィシーは国有であったが、温泉開発利用の権利を第三者に賃貸していた。国有でありながら民間経営というこのような温泉はほかにはブルボーヌ、プロンビエール、ヴィシー、ブルボン・ラルシャンボなどが挙げられる。国有で国営というのはエクス・レ・バン一つである。

33）Cf. Wallon, *op. cit.*, pp. 97-98.

34）プレイヤード版の解説によると、彼はすぐさまこの事件に興味を持ち、最初の梗概を書き送ったが、これは『ジル・ブラス』紙と『ゴーロワ』紙に掲載された。1885年8月に『私の25日間』というタイトルで温泉療養の話が載ったのは『ゴーロワ』紙であった。

35）Weber, *op. cit.*, p. 225.

36）*Mont-Oliol*, p. 696.

37）*Ibid.*, p. 610.

38）*Ibid.*, p. 611.

39）*Ibid.*, p. 620.

40）Cf. Wallon, *op. cit.*, p. 250.

41）*Mont-Oliol*, p. 616.

42）Marc Boyer, *Invention du tourisme*, Gallimard, 1996, pp. 60-61.

43）*Mont-Oliol*, p. 621.

44）*Ibid.*, p. 623.

45）*Ibid.*, pp. 630-631.

46）*Ibid.*, p. 634.

47）*Ibid.*, p. 646.

48）*Ibid.*, pp. 612-613.

49）*Ibid.*, p. 631.

50）Boyer, *Histoire du tourisme de masse*, p. 31.

51）*Mont-Oliol*, p. 653.

52）*Ibid.*, p. 662.

53）*Ibid.*, p. 661.

54）*Ibid.*, p. 669.

55）*Ibid.*, p. 669.

56）*Ibid.*, p. 672.

57）*Ibid.*, p. 673.

58）*Ibid.*, p. 674.

59）もちろん、温泉療養中の患者の死亡は温泉町の評判に関わる不吉なことであった。

しかし万一そういう事態が起こった場合には故郷で埋葬するために遺体に防腐処置を施す必要があり、大きな温泉リゾートにはこの種の専門家が存在した。1864年にガルニエ兄弟の出版したヴィシーのガイドには、療養者に役立つ一般的な情報の項に「死亡の場合」という悪趣味なものがあった。しかし医師が瀕死の病人を温泉リゾートに送り込まなくなったためと、万一死亡の場合には温泉医が大急ぎで遺体を送り返したために、このような情報提供は一般的とはならなかった。Cf. Wallon, *op. cit.*, pp. 221-222.

60）*Mont-Oliol*, pp. 691-692.

61）*Ibid.*, p. 691.

62）*Ibid.*, p. 691.

63）ピンは男の裏切りと別離の象徴であった。

64）*Mont-Oliol*, p. 700.

65）露骨に悪辣な資本家というイメージからはほど遠いが、世のすべての事物に正確な価を付けることを当然と思い、金銭がすべての判断基準となり、仕事にかまけて妻の不倫にも全く気づかず、結局はブレティニ（フランス人）の子どもを自分（ユダヤ人）の子どもと信じて疑わないアンデルマットの金銭面以外では「誠実」かつ「素朴」な性格設定という、いささかカリカチュアじみた描き方と、夫に対する妻の罪の意識のなさ（クリスティアーヌは夫と自分があまりも違いすぎていると思いこむことによって、自分の道徳的な罪を感じられないのである）、さらに彼に対するゴントランの人種的揶揄などからモーパッサンの反ユダヤ主義を云々することは早計であって、この作品は当時のフランスの反ユダヤ的な雰囲気を作中人物の一部に反映していると見る方が適当だろう。モーパッサン自身、ロスチャイルド一族を始めとするユダヤ人と交際があり、彼らの社会を近くから見知っていたからこそ、アンデルマットという人物を創造し得たのだったが、それと同時に当時は、『モントリオル』（1887年）出版の一年前にたとえばドゥリュモンのユダヤ人排撃の書『ユダヤ人のフランス』（1886年）が大きな反響を呼んだように、あるいは1889年にはフランス反ユダヤ人連盟が結成されたように、フランス全体に反ユダヤ的雰囲気が漂っていた時代でもあった。そしてそうした雰囲気はドレフュス事件（1904年）で一つのピークを迎えるのである。

66）*Mont-Oliol*, pp. 697-698.

67）*Ibid.*, p. 685.

引用・参考文献

BEAUTHÉAC, Nadine, *L'art de vivre au temps de Proust*, Flammarion, 1999.

BOURLANGUE, Angéline et SOLDEVILLE, Alain, *Les promenades de Maupassant*, Chêne, 1993.

BOYER, Marc, *Histoire du tourisme de masse*, PUF, 1999.

—— *Invention du tourisme*, Gallimard, 1996.

—— *Le tourisme de l'an 2000*, Presse universitaires de Lyon, 1999.
CARON, François, *Histoire des chemins de fer en France 1740-1883*, Fayard, 1997.
CORBIN, Alain, *L'Avènement des loisirs 1850-1960*, Aubier, 1995.（渡辺響子訳『レジャーの誕生』藤原書店、2000年）
CLÉBERT, Jean-Paul, *Guide de la France thermale*, Horay, 1974.
DUMESNIL, René, *Guy de Maupassant*, Tallandier, 1979.
LANGENIEUX-VILLARD, Philippe, *Les stations thermales en France*, PUF, 1990.
MARCOIN, Francis, *Les romans de Maupassant Six voyages dans le bleu*, Edition du temps, 1979.
MAUPASSANT, Guy de, *Mont-Oriol* in *Romans*, édition de Louis Forestier, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1987.（桜井成夫訳『モントリオル』、『モーパッサン全集』第一巻所収、春陽堂書店、1965年）
小倉孝誠『19世紀フランス　夢と創造』人文書院、1995年。
PEYROUTET, C., *Le tourisme en France*, Nathan, 1998.
POMEROL, Charles, *Terroires et thermalisme de France*, Editions du BRGM, 1992.
TURIEL, F., *Maupassant biographie, étude de l'œuvre*, Vuibert, 1999.
WALLON, Armand, *La vie quotidienne dans les villess d'eaux (1850-1914)*, Hachette, 1981.
WEBER,
Le guide rouge France 2000, Michelin, 2000.

Lire *Mont-Oriol* de Guy de Maupassant; fièvre thermale fin de siècle